

東京に残る長崎偉人の足跡～高島秋帆について～①

院16修 中村 奈美

はじめに。皆さんは、東京で過ごしている生活のなかで、ふと、長崎ゆかりであることを感じることがないでしょうか。いつも通る場所や、日常生活を過ごすなかで、実は過去に長崎のなんらかの関連があったを知ると驚きや、親近感がわいてちょっぴり嬉しくなることなどないでしょうか。実にこの感覚が多くあり、歴史をもっと知っていたら長崎の生活も楽しめたのではないかと残念に思う時もあります。そこで、どうせ東京にいるのなら、江戸にある長崎探しをして共有し、多くのひとと一緒に楽しもうじゃないか。と考え行動することにしました。

私は、長崎市公認の長崎伝習所塾という長崎市の活性化のためのボランティア活動を行っています。第一段は、長崎半島である長崎市南部全域を知ってほしくて、「長崎・野母半島パワースポット発信塾」として、長崎の地元民が価値を知らないままの歴史や神社仏閣、食文化を紹介しています。地味な地元応援活動です。この活動の延長として、第二弾として、東京にある歴史のなかで長崎ゆかりの人物が貢献していた事や、なんらかのことや建物など、あまり知られていないことを掘起こし、紹介していく「渋谷・長崎歴史文化情報発信塾」として活動を始めています。『ここにもあった江戸の長崎!』と、宝探しを楽しむかのように動いています。塾活動の目的は、日本が進化していくなかで、貢献した長崎の偉人達がいいたことを多くの人に知ってもらうことで遠い長崎を身近に感じ、興味を持ってもらいたいこと。また、東京在住で、なんらかの形で長崎にゆかりのある方には、一種の郷土愛（第二の故郷でも）を持ち、長崎に思いをはせてほしいこと。なにより地元長崎の人たちには、歴史的価値を知り、街に残る建物や文化財を守ってほしいと願いを込めて活動をしています。

塾長は、古写真研究者の私大教諭で渋谷龍馬会の会長です。東京出身ですが、長崎大学の本校で研究生として過ごしていた経験もあり、長崎に馴染みを持つ人です。副塾長は長崎の小曾根献堂の末裔にあたり東京在住です。献堂は書家。篆刻家で幕末志士達のパトロンにもなっています。個人所有のグラバー園周辺の土地を幕府に提供したり、出島建設のための工事資金を出した一人です。明治政府になったときに国が初めて国璽（国の印鑑）を作りますが、これを彫った作家でもあります。坂本龍馬の妻おりょうを家に住ませ生活の面倒をみていたので、彼女が使っていた月琴が長崎の小曾根本家には残っています。こういう素晴らしい長崎人がいたことも長崎市民には、あまり知られていません。塾生には、ほかにも歴史上の長崎に関連する偉人の末裔の方々（坂本家当代、勝海舟、榎本武揚、上野彦馬、平井希昌、伊藤博文など）にも参加してもらっています。情報整理して大変ですが、活動はとても面白いです。

長崎といえば、トーマス・グラバーや坂本龍馬、勝海舟などが歴史上の人物として挙げられますが、殆どの有名な人物は、他所から長崎に来て活躍した人ばかりです。長崎で幼いころから育ったからこそ多くのことを普段から見て、触れる機会を得て、それなりの重要な役割をもち国のために貢献した長崎人もいるのですが、なぜか地元長崎でも知られていません。否、長崎こそ、知らないというのが正しいかもしれません。東京には貢献していた軌跡がいくつも残っていますし、訪れてみると知らなかったことばかりで、とても楽しめます。当時の彼ら、彼女らの影響力の強さも実感できます。もっと多くのひとに知ってほしいです。一方で、長崎には、その方々の名残のある家や場所が残っていても、知られないまま、ほぼ放置状態。このままでは風化していく状態にもあるので、今回をきっかけにして少しでも知ってもらえたらと願っています。

そこで、塾の一年目は、日本の近代化へ貢献しながらも、あまり（ほぼ）知られていない

東京に残る長崎偉人の足跡～高島秋帆について～②

院16修 中村 奈美

長崎出身（長崎生まれもしくは長崎で育った）の人物に焦点をあて紹介する予定です。今回、私が推しで担当している長崎生まれで、日本の近代化に向かうきっかけを作った一人である「高島秋帆」について、東京瓊林会でも少し紹介させていただきます。高島秋帆については、私よりもっと詳しくご存知の方も沢山おられると思いますが、稚文に少しお付き合いください。

西洋砲術火家 高島秋帆

高島秋帆は、1798（寛政10）年に長崎で生まれました。父四郎兵衛は、出島台場を守る長崎警備の重責を担っていた町人。秋帆は、幼いころから文学好きで利発で学問に励み、蘭学に興味を持ち語学を習得し、絵心もあったようです。1808（文化5）年、秋帆が11歳のときにイギリス軍戦艦フェートン号が、オランダ船に化け長崎港へ入港、二名の商館員を人質にとり、水や食料を積ませた後に長崎港を立ち去り、当時の長崎奉行、松平康平は責任をとり切腹。と、いう有名な「フェートン号事件」を父にいつも連れられていた秋帆は事件を目の当たりに見ます。当時は、オランダとイギリスは交戦中で、子ども時代の秋帆にとっては緊迫した海外情勢を知ることとなり、日本は大丈夫か？と、国防意識が芽生えたと言われています。この頃の長崎は、日本で唯一の国際貿易港であり、国防の防波堤という重要な役割もありました。フェートン号事件の前には、ロシアが通商を申し込んできたのを出島商館長ドゥーフの意見を聞きロシア使節団を退去させたことで、数年後にはその報復として択捉島を襲撃し、日露関係が悪化するなど緊迫もあっています。そういう事をまざまざと、長崎で聞いていた秋帆は、警備の必要性を常に感じていたようです。

父は、実際に当時の荻野流砲術の奥儀を習得し、師範役を務めていました。秋帆が21歳の頃には、町年寄見習に就任し、出島に自由に出入りしオランダ人達と仲良くなります。秋帆はオランダ商館の世話をしながら、船に装備された大砲はじめ武器に触れ、海外でのアヘン戦争のこと、香港の話などを知り、日本も植民地になりかねないと危機感を持ち、幕府に進言しますが、誰もが日本が負けるわけないと、全く取り合わなかったようです。そんななかで秋帆は、当時のオランダ商館長のステュルレルと親しくなります。ステュルレルは、ナポレオンが破れたワーテルローの闘いに従軍した軍人で、元陸軍大佐。その彼から直に西洋兵器、西洋兵術を熱心に学びます。蘭学に長けていた秋帆は、この頃からオランダから銃砲や兵術書をしきりに輸入し、独自で理論や技術の研究習得に努めます。そして、西洋式を取り入れた独自の高島流砲術をつくりあげ、1835（天保6）年には、洋式砲モルティール砲を鑄造します。これを佐賀の武雄鍋島家は採用します。これにより、高島流砲術が本格的に戦術として広まっていきます。この頃、秋帆は町年寄本役となり、江戸にも名が聞こえるようになります。



旧高島別邸 長崎市東小島町

東京に残る長崎偉人の足跡～高島秋帆について～③

院 16 修 中村 奈美

1841（天保 12）年 5 月、幕命により、今の板橋区にあった徳丸原（とくまるがはら）で、秋帆は弟子 99 人と共に西洋式砲術調練を披露します。大砲の爆音が轟き、砲弾は遠くまで飛び、その破壊力の大きさに人々は恐れ驚いたと記録されています。和式の射撃は、一人ひとりを打ち抜くことに優劣に重点を置くことに対し、西洋式は組織的な兵術。大勢を打ち抜くことに重点を置いており、これを独自に其々の良いところを取り入れたのが、高島流砲術となっています。これら集大成を見事に披露しました。この歴史的な瞬間を見たのは、幕府の検分者や、各地の大名、蘭学者、砲術師に町民のやじ馬など、約 2000 人とも 3000 人とも言われています。中には勝海舟もいました。ここから、日本は軍事力の強化が始まり、佐賀鍋島では国産の反射炉をつくり、鉄の鑄造技術を進化発展させ、日本は開国に備えていきます。工業近代化の始まりです。

そんななか、秋帆は洋学派（革新派）と和学派（保守派）との軋轢のなかで、長崎貿易の役員でもあったことから和学派の一味から、不正の言いがかりをつけられ、約 11 年間投獄されます。世界中から、通商条約締結を迫られた日本でしたが、1853（嘉永 6）年にペリー来航で海防策が急務となり、秋帆は釈放。このときには名前を嘉平と改め、日本は世界を広く見て開かれるべきだと、平和開国通商「嘉永上書」を幕府に提案します。50 代を超えていました。晩年は、東京都文京区で過ごし、薩長同盟からの激動の幕末を見届けることはなく、1866（慶応 2）年に亡くなります。

昭和 40 年代の高度成長期に板橋区は、秋帆が弟子たちとともに披露した「徳丸原」にマンモス団地をつくります。ここを高島秋帆の名前からとり、町名を「高島平」とします。長崎町人から、西洋砲術家となった秋帆。鎖国時代の日本で唯一、世界的視野で日本を取り巻く状況を見る視点を持ち、環境から培った能力を生かし、日本を守るために行動力で示し、国を動かすきっかけを作った偉人であったと、もっと注目して欲しいと思います。改めて彼のことを知ってほしいと心がささやき動いています。



秋帆の軌跡を訪ねて。

長崎市には、高島旧別邸が、国指定文化財として残っています。堅牢な石垣が立派で人目を惹きます。敷地内には鉄砲射撃跡ついている石もあります。多分日本で最古の弾薬庫と言われる建物が残っています。ここは別邸ながら広大な敷地で石灯籠や石垣は見応えがあり、当時の高島家の地位が窺えます。長崎に行かれた時は、思案橋からも歩いて 10 分ほどで行けますのでぜひ立ち寄ってみてください。

東京では、文京区本郷にある大円寺に秋帆と息子の墓があります。墓には東京大空襲のときに受けた爆撃弾の被害の爪痕が残っています。亡くなってからも、なお弾薬武器に関わるなど、

東京に残る長崎偉人の足跡～高島秋帆について～④

院 16 修 中村 奈美

ある意味、日本の国防の必要性を常に見つめ続ける人なのかもしれません。今後には、もうそのような事は無く平和な国でいられることをお願いしてきました。同町にある秋帆の晩年過ごした所には当時の井戸が残っています。一般人の民家のため、運がいい方は見せてもらえます。

板橋区には、高島平駅から5分程歩いた徳丸ヶ原公園には、当時のことを記す碑があります。そこからバスで5分ほど移動すると、曹洞宗の松月院があります。この宝物殿には幕府からの朱印箱や様々な物を見ることができます。秋帆の関連のものもあり、貴重な歴史を垣間見ることができます。境内には、火技中興洋兵開祖高島秋帆紀功碑があり、大砲と弾を記念碑にして称えています。いかに秋帆が偉大だったかを知ることになります。松月院から坂をぼちぼち下っていくと、板橋区立郷土資料館があります。ここには、本当に豊富に資料が展示されており、勉強になります。鎧兜と火縄銃から始まり、西洋式の銃、武雄で作ったモルティール砲のレプリカや、当時の西洋式大砲、手書きの射距離を計算式や記帳されたものや、絵画など、ずらりと展示されて、とても面白く勉強になります。



江戸東京で長崎の偉人に触れる。楽しむ。

秋帆のことを調べるうちに多くの方に協力いただくこととなりました。板橋区には、高島秋帆を師と仰ぎ、「高島流砲術 西洋流火術鉄砲隊保存会」の方々がおられます。例年、板橋区民祭りでは、当時の衣装を纏い、鉄砲で空砲を撃つ演武を披露しています。この会の皆さんにガイ

東京に残る長崎偉人の足跡～高島秋帆について～⑤

院16修 中村 奈美

ド役として色々な関連スポットを紹介してもらいました。また松月院の和尚、板橋区職員の学芸員さんには、丁寧に資料も提供いただき教えていただきました。また、板橋区長に連絡をとってみたところ、塾活動について、たいそう喜んでいただき私たちの知らぬところで、いつの間にか色々動きだしてきました。とりあえず、引き続き頑張ります。

今年度は、長崎出身の偉人に絞り、小曾根献堂、高島秋帆、写真術を創った上野彦馬（坂本龍馬の写真撮影など）、幕末の長崎奉行役人で後に明治政府の高官となり大久保利通ら外交の仲介役を務めた唐通詞の平井希昌を纏めています。2年目からは、シーボルトやその娘と孫娘、榎本武明、本木昌造など、長崎にいて礎をかため、日本に貢献した人らを考えています。私たち塾では、紙面で紹介するだけではなく、これを機に「東京江戸版の長崎さるく」と称し、公共交通機関を使ってポチポチと歩きながら東京にある長崎を楽しめるコースを探り、実際に訪れる楽しさと共に紹介していこうと考えています。

上述の皆さんや各方面から協力いただけると、盛り上がっていますので、近いうちいつか、「江戸版長崎さるく」を瓊林会の皆さまにもご紹介させていただきます。その時は、皆さまぜひとも、東京ポチポチあるきにご参加ください。

何より、日本の中心地にいて、長崎ゆかりの事がこんなにあったのだと改めて知り、遠い長崎を身近に感じ、楽しんでいただけたら嬉しいです。



板橋区長と西洋流火術鉄砲隊保存会の皆さまと



塾生